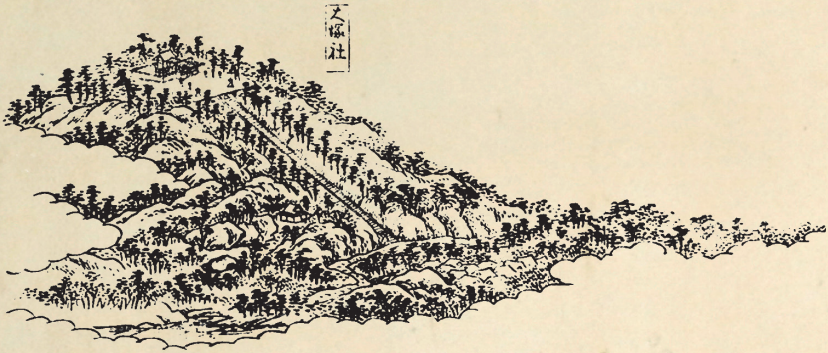
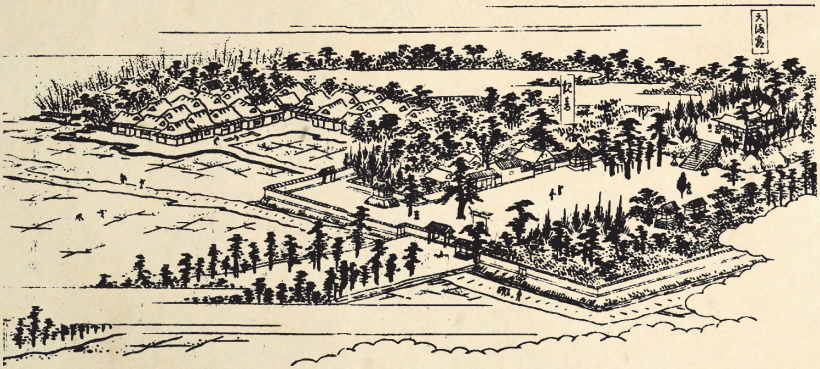
市制施行60周年記念

松原歴史ウォーク

2南東コース





松原市

目　次

２．コース図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２-３
26　反正天皇丹比柴籬宮と柴籬神社・・・・・・・・・・・・・・・４
27　「ちちかみはし」と歯神社　・・・・・・・・・・・・・・・・・６
28　樋野ヶ池窯と須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
29　大王墓の河内大塚山古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
30　立部古墳群の築造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
31　柴籬山願正寺の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
32　上田村の福應寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
33　反正山村の善法寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
34　新堂・十二社権現社の鎮座・・・・・・・・・・・・・・・・・20
35　高鷲山と号する良念寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
36　阿弥陀如来となった浄光寺・旅休・・・・・・・・・・・・・・24
37　王仁の聖堂址伝説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
38　河内鋳物師の工房・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
39　西蓮寺から出岡公民館へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
40　歴史街道としての竹内街道・・・・・・・・・・・・・・・・・32
41　中高野街道に息づく大師堂・・・・・・・・・・・・・・・・・34
42　向福寺から円正寺へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
43　泉福寺の文化財・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
44　正井殿の「連理の松」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
45　栄久寺にあてた教如の決意・・・・・・・・・・・・・・・・・42
46　来迎寺と法明上人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
47　高木氏と丹南藩１万石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
48　丹南天満宮の文化財・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
49　丹南に祀られる牛滝さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
50　松川長右衛門と狭山池用水・・・・・・・・・・・・・・・・・52
表　道しるべ (道標) 一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・54

※本文の柱下段のナンバーは、広報『松原歴史ウォーク』連載時の番号です

市域を国道 309 号線と府道堺・大和高田線 (12 号) を境として、
北東・南東・南西・北西の 4 コースに分けました。

■はトイレのある公共施設です。

26 反正天皇丹比柴籬宮と柴籬神社

５世紀代、河内に置かれた最初のミヤコ　　上田７

古墳時代中ごろの５世紀前半、反正天皇が丹比柴籬宮で即位したと伝えています。大和王権の宮が、河内に置かれた初めての出来事です。松原は、この丹比野の一角にあります。

わが国で最も古い歴史書である『古事記』や『日本書紀』によると、反正は仁徳天皇の第３皇子で、兄履中のあと、18 代天皇となりました。この丹比柴籬宮が上田７丁目の柴籬神社のあたりにあったと伝承されています。同社は、反正天皇などを祭神としています。５世紀末に 24 代仁賢天皇の時、創始されたと伝えています。江戸時代には広庭之祠とか天神宮 (天満宮) ともよばれ、境内には広場山観念寺という神宮寺もありました。

柴籬神社の南門に、「反正天皇柴籬宮址　昭和十九年一月　大阪府建立」の立派な石碑があり、西鳥居前にも「丹比柴籬宮址　大正八年　大阪府」の石碑が建てられています。

『古事記』には「水歯別命 (反正)、多治比の柴垣宮に坐しまして、天の下治めたまひき。此の天皇、御身の長、九尺二寸半。御歯の長さ一寸、広さ二分、上下等しく斉ひて、既に珠を貫けるが如くなりき。…天皇の御年、陸拾歳ぞ。御陵は毛受野に在り」と記されています。

１尺を 30cm とすると、反正は身長２m77cm もある長身で、その歯の長さも３cm を測るという信じられない数値が見られます。これは、水歯別という反正の名前から、ことさら歯が立派で、珠を貫いたようにきれいであったと伝えられていたからでしょう。天皇は 60 歳で亡くなり、いまの堺市の百舌鳥に葬られたとあります。

これに対し、『日本書紀』の反正天皇元年条に「冬十月に、河内の丹比に都つくる。是を柴籬宮と謂す。是の時に當りて、風雨時に順ひて、五穀成熟れり。人民富み饒ひ天下太平なり」とあり、その治世は５年あまりにおよび、国内は豊作で平和であったと伝えています。

しかし、現在のところ、宮の存在を確かめる遺構や遺物はまだ見つかっていません。当時の宮は、のちの平城京（奈良市）や平安京（京都市）のように、天皇が政治を行う大極殿や、役人が政務をとる朝堂院などの建物が建ち並ぶ都城ではありませんでした。ですから、宮跡の検出は容易ではありません。しかし、一般の人々の住むたて穴住居や掘立柱建物とは違った突出した宮を想像させるような遺構が、丹比野の地下に眠っていることでしょう。

柴籬神社のあたりは、宮号を引き継いだ神社名や、神社西方に残る天皇名にゆかりをもつ「反正山」の地名などから、宮跡の有力な候補地であることは疑いありません。

同地は、旧石器時代から近世までの上田町遺跡に含まれます。広範囲に古墳時代のたて穴住居や井戸、壺・甕・高坏などの土器あるいは古墳跡出土の埴輪が見つかっています。今後も宮跡を探すロマンが追い求められるでしょう。

反正天皇丹比柴籬宮址と柴籬神社

27 「ちちかみはし」と歯神社

愛児に乳を含ませたまま絶命した母の悲しい伝説　上田１・７

上田１丁目の松原郵便局前に、正面には「ちちかみはし」、両側面に「長尾街道」、裏面に「明治四十三年二月修繕、大阪府」と刻まれた道標があります。明治 43 年 (1910) ２月、大阪府が古代からの堺と大和を結ぶ長尾街道 (大津道) に建てたモニュメントです。

「ちちかみはし」には、次のような悲しい伝説が残されています。

「遠い昔、京から来た高貴な身分の母親が愛児に乳房を含ませていました。子どもは母親の乳に満足してスヤスヤと眠っていましたが、急にむずかり、口に含んでいた乳房を歯でかみきってしまいました。このため、母親は愛児を抱いたまま亡くなったのです」

新堂１丁目の松原中学校方面から北流してきた今井戸川は、河内松原駅の西側線路をくぐります。やがて、上田１丁目の長尾街道にぶつかる字「中門」(長尾街道と中高野街道が交わる阿保茶屋交差点を西へ 100m) で西流する本流と東流する支流に分かれていきます。

江戸時代、「中門」には堰樋が設けられていました。そこは、阿保村の海泉池から三宅村の大海池に至る用水の取水掛口でした。東と西に分岐する水流の堰高を定める享和元年 (1801) ７月の分量石がいまも残されています。灌漑領域の上田村や三宅村の人々が立ち会って決めた碑文も見られます。

「中門」から西へ 200m 進むと先の道標があり、今井戸川が長尾街道を横切る場所に「ちちかみはし」が架けられていたのです。愛児が母親の乳房を歯でかみきった所でしたので、橋の名となりました。川は街道に平行する南側では暗渠となっていますが、松原警察

署の東側からは北へ向きを変えます。

「ちちかみはし」の悲しい伝承は、のち人々の哀れをさそいました。「ちちかみはし」と「中門」の真ん中、街道の南側に住吉神社が祀られていました。同社は、上田村反正山地区の氏神ですが、村人は祭神の住吉大神と共に、亡くなった母親や乳をかみきった愛児を歯神として同社に合祀したのです。このため、住吉神社は歯神社ともよばれるようになりました。

住吉神社は、室町時代の永禄年間 (1558~69) の創建と伝えています。柴籬神社 (上田７丁目) 境内にあった神宮寺である観念寺の法印秀盛が勧請しました。境内は東西 22m、南北６m。本殿は一間社流造でした。明治初年に柴籬神社に合祀され、現在は社務所の真向いに「歯磨面」の石面と共に祀られています。

「中門」の名は５世紀前半、反正天皇がミヤコとした丹比柴籬宮の中門があったという伝承からつけられました。丹比柴籬宮の推定地跡に建つ柴籬神社に合祀された歯神社では、反正天皇も珠のように歯がきれいであったことから、「はがみさん」として歯が丈夫になることを願って、「は」にちなみ、毎年８月８日夜８時８分から祭礼が行われています。

「ちちかみはし」道標と歯神社

28 樋野ヶ池窯と須恵器

6世紀中葉ごろにつくられ、河内大塚山古墳に供給か　上田6

上田6丁目に上田墓地があり、その南側には樋野ヶ池が水をたたえています。池の南側は、平成18年3月まで府立松原職業訓練校が建っていた跡地です。旧校地は、小字名をとって若山遺跡とよばれる埋蔵文化財地で、7～8世紀の飛鳥・奈良時代に、土地利用がされていました(大阪府文化財センター『若山遺跡』平成22年)。

樋野ヶ池に目を転じると、若山遺跡に接して、南北に長い小島が浮かんでいます。池の中に島がある景観は、松原周辺ではそれほど珍しいものではありません。樋野ヶ池では、新たに島をつくったのではなく、もともと段丘地形であったものが、池ができた際、段丘の一部が残され、島状となったと考えられます。

島は樹木で覆われていますが、その傾斜地北東部からは、古墳時代の須恵器を焼いた一基の単独窯が見つかっています。昭和49年(1974)の発掘調査で、窯体の奥壁と側壁の一部が確認され、壁は厚くなく、また少量ですが、灰原の遺物や灰も検出されました(松原市教育委員会「樋野ヶ池窯跡出土資料」『三宅遺跡』昭和55年)。

その後も、近くに住む橋本春二さんによって、樋野ヶ池窯から出土し、散乱していた須恵器がまとまって採集されていたことがわかりました。橋本さんは、のちにそれらの遺物を、甥である考古学者の橋本達也さん(鹿児島大学准教授)に託されたのです。達也さんは、これらの遺物を丹念に分析・紹介し、樋野ヶ池窯の性格を明らかにしようとされました。

採集された須恵器は、坏身や坏蓋が多く、食物を盛る脚つきの台

である高坏の他、液体を入れる甕や容器の壺などの破片も見られました。これらの多くは、還元していない生焼けのもの、外面のみ赤褐色のもの、断面がエンジ色のものもあり、焼け歪みもありました。まさしく窯跡資料の特色を備えています。

その時期は、松原から８～10km 離れた須恵器の大量産地である堺市・泉北ニュータウンの丘陵に存在する陶邑窯跡群の編年で、専門的になりますが、高蔵寺地区の TK10 型式から陶器山地区の MT85 型式にあてはまります。古墳時代後半の６世紀中葉のことです。最盛期を迎えた陶邑窯跡群が地方波及した窯跡です。

では、樋野ヶ池窯は、何のために設けられたのでしょうか。一般的には、樋野ヶ池から東へ 200m ほど離れた河内大塚山古墳 (西大塚１丁目) に副葬品として、供給されるためと見るのがよいのではないでしょうか。

河内大塚山古墳は、わが国で５番目の墳丘規模を持つ巨大前方後円墳です。出土遺物は不明ですが、樋野ヶ池窯と同じく６世紀中葉以後につくられたと考えられています。ただ、古墳が完成する前に棄てられたとも考えられており (未完成説)、須恵器が使われなかったかもしれません。

樋野ヶ池窯の小島

29 大王墓の河内大塚山古墳

6 世紀中葉以後、最後の巨大前方後円墳　　西大塚 1

近鉄電車が河内松原駅を出て、恵我ノ荘駅へ向かう途中、南側にうっそうとした小山が目に入ります。府道大和高田－堺線が線路を越える高架上からは、いっそうその全容が望まれます。これが大塚山古墳です。各地に大塚山とよばれる古墳が多いので、地名をつけて河内大塚山古墳とも称しています。

河内大塚山古墳は、東除川の西側に発達した中位段丘面に築かれており、墳丘の南北を走る中軸線を境に、西は松原市西大塚、東は羽曳野市南恵我之荘とに行政区域が分かれています。人工の造山ですが、後円部頂上は松原市内で最も標高の高い場所です。

古墳の形は前方後円墳とよばれるもので、周囲に壕をめぐらせています。その墳丘規模は、全長 335m、前方部幅 230m、後円部直径 185m、前方部高さ 4 m、後円部高さ 20m をはかり、前方部はほぼ北面しています。

規模の大きさからすると、堺市百舌鳥の大仙陵古墳 (仁徳陵古墳)、羽曳野市古市の誉田山古墳 (応神陵古墳)、百舌鳥の上石津ミサンザイ古墳 (履中陵古墳)、岡山県の備中造山古墳に次ぐわが国で 5 番目の巨大古墳です。当時、墓誌などがなかったことから、古墳の被葬者を特定するのは難しいのですが、大和王権の大王 (のちの天皇) の墓として築造されたと考えてよいでしょう。時代的には安閑天皇や欽明天皇陵説や、墳丘が乱れていますので未完成説も出されています。

古墳時代は 3 世紀後半～ 7 世紀後半ごろまでの時期をさしますが、大和や河内・和泉地方を中心に巨大前方後円墳がつくられるのは、

ほぼ５世紀代が中心です。

河内大塚山古墳は、後円部にいまでも「ごぼ石」とよばれる横穴式石室の天井石と思われる巨石があり、そのうえ、江戸時代の 18 世紀後半の宝暦～明和年間ごろまで「磨戸石」とよばれる横穴式石室の一部が後円部南東に開口していたことが、文献の上から判明しています。また、埴輪の存在が明瞭ではありません。さらに、前方部が低く、大きく広がるうえ、後円部の段築がはっきりしません。

これらは後期古墳の特徴を持っていますので、河内大塚山古墳の築造は６世紀中葉かそれ以降と考えてよいと思います。巨大前方後円墳の最後の時期の古墳で、６世紀代ではわが国最大の大きさです。

６世紀後半以後、大王家では、前方後円墳はほとんどつくられなくなり、方墳や八角形墳形式に変わっていくのです。

河内大塚山古墳は、南北朝～戦国時代には丹下氏によって丹下城が築かれました。また、江戸時代には前方部に大塚村の集落が形成され、後円部には天満宮が祀られました。しかし、大正 14 年 (1925) に陵墓参考地となりましたので、昭和 3 年 (1928) までに集落は墳丘外に移されました。現在、宮内庁が管理をしており、墳丘内に立ち入れません。

河内大塚山古墳

30 立部古墳群の築造

つぶされ、地下に埋没した古墳　　立部３

松原の東隣りの羽曳野市や藤井寺市には、４世紀末～６世紀前半に至る約 150 年間に、津堂城山古墳や誉田山古墳 (応神陵古墳) など大王墓の伝承を持つ巨大前方後円墳から 10m に満たない小方墳まで、非常に多くの古墳で形成される古市古墳群があります。

西隣りの堺市にも、５世紀代を中心として大仙陵古墳 (仁徳陵古墳)・上石津ミサンザイ古墳 (履中陵古墳)・田出井山古墳 (反正陵古墳) など、大小多数の古墳で構成される百舌鳥古墳群があります。

これに対し、両古墳群に挟まれた松原では、墳丘全長 335m の巨大前方後円墳の河内大塚山古墳 (西大塚１丁目) と、同じく前方後円墳と推定される一津屋古墳 (一津屋５丁目の厳島神社境内) の２基のみが、現存しているにすぎません。ですから、これまで「松原には古墳が少ない」と見られてきました。

ところが最近、市内各地で後世に墳丘を削平された古墳や、古墳に置かれた円筒埴輪・形象埴輪も数多く検出されるようになりました。もともと、松原には近世の文献や絵図・地籍図から、三宅中６丁目の権現山古墳跡 (前方後円墳) や天美西１丁目の狐塚古墳跡 (前方後円墳) などの存在も知られていました。

平成２年 (1990)、松原市教育委員会は立部３丁目の大塚運動広場の施設に伴い発掘調査を行いました。その結果、古墳時代から中世に至る遺構や遺物がたくさん見つかりました。とくに、古墳がまとまって７基も検出され、立部古墳群と名づけられました。河内大塚山古墳が北東 200m ほどの近さで望まれます。

各古墳は、いずれも周溝をもつ円墳１基、方墳６基で構成されていました。円墳は径 12m で、周溝から円筒埴輪や大刀の形象埴輪が出土しました。６基の方墳は１辺４～５m から、最大で１辺 10m ほどと小規模ですが、隣接して築かれており、周溝を共有しています。とくに、６号方墳の周溝からは朝顔形円筒埴輪、甲冑形埴輪（三角板鋲留短甲や肩甲と草摺の部分）、須恵器の坏が出土しました。

ただ、いずれの墳丘も中世までに田畑などの開墾で完全に削平されており、地下に埋没していました。その築造時期は、６号方墳が５世紀末～６世紀初頭、円墳および他の方墳は６世紀中ごろと考えられます。６号方墳がまずつくられ、円墳を盟主とした２世代ほどの小豪族がそこを墓域としたのでしょう。

市内ではほかにも、ゆめニティまつばら近くの上田５丁目に全長 220m におよぶ前方後円墳の山ノ内古墳（全壊）があったと想定されています。また、一津屋古墳の北側には前方後円墳の川ノ上古墳（全壊）も存在していたようです。川ノ上古墳の溝からは人物形埴輪・蓋形埴輪・円筒埴輪・土師器・須恵器などが出土しました。

今後とも各地で、墳丘が削平された古墳がまだまだ見つかる可能性があります。

立部古墳群の発掘地

31 柴籬山願正寺の変遷

鎌倉期に真宗となったと伝える松原村上田の檀那寺　　上田７

上田７丁目の一角に、東本願寺を本山とする真宗大谷派の願正寺が建っています。すぐ東には柴籬神社の杜が見渡せます。江戸時代、この地は丹北郡松原村上田でした。時には上田村とも表記します。

同寺は、もともと真言宗でしたが、鎌倉時代後半の弘安３年(1280) ごろ、柴籬宮社坊の円宗が浄土真宗に転宗したと伝えています。松原村などの氏神である柴籬神社境内に建っていた神宮寺の僧が関わったというのです。願正寺の山号は柴籬山と称しますが、こうした柴籬宮との連がりから付けられたとも考えられます。柴籬の名が、５世紀前半に同地にミヤコを置いたと伝える 18 代反正天皇の丹比柴籬宮に由来することはいうまでもありません。大正時代から現在まで、願正寺住職は上田の旧家であった松川氏がつとめていますが、それ以前は柴籬氏が寺を守っていた時期もありました。

河内では、本願寺８世の蓮如が明応年間 (1492 ～ 1500) に布教した際、浄土真宗に転じたと伝える寺が多いのですが、願正寺の弘安３年という寺伝を信じれば、ずい分早くから「南無阿弥陀仏」の教えが松原に広まっていたことになります。しかし、願正寺がいまのようにお寺として整っていったのは、江戸時代前半ごろからです。元禄５年 (1692)11 月にまとめられた松原村の『寺社帳』に、願正寺は寛永年間 (1624 ～ 43) に円乗が中興したとあります。

円乗の後、東本願寺が末寺に下す『申物帳』には、寛文３年 (1663) ３月、２代住職の円知の時に、願正寺の名を与えられると共に、親鸞聖人絵像を東本願寺 14 世の琢如から下されたとあります。円知に

は寛文５年７月にも、聖徳太子やインド・中国などの七高祖像が本山から下されました。いまも、本堂には本尊の阿弥陀如来像と並んで、寛文年間に与えられたこれらの絵像が裏書と共に祀られています。

先の『寺社帳』によると、元禄５年当時の願正寺は、わら葺(ぶ)きで庇(ひさし)だけが瓦の道場 (本堂) とわら葺きの庫裏(くり)、瓦葺きの山門が建っていました。この頃には堺御坊 (現難波別院堺支院) の末寺に入っており、住職は４代の円流(えんりゅう)でした。

願正寺の文化財として注目されるものとして、江戸時代半ばの宝永(ほうえい)２年 (1705) ２月と幕末の文政(ぶんせい)４年 (1821) ９月に本堂が再建されたことを記す棟札(むなふだ)があげられます。とくに、宝永２年棟札は市域に現存するものでは古い時期のもので、５代円海(えんかい)は「奉再興造立河陽(かよう)松原願正寺道場一宇惣門徒中寄進」と記しました。また、12 代円瑞(えんずい)時代の文政４年の棟札に、この時の棟梁(とうりょう)大工が地元の松原村新堂の村田八良兵衛で、平野 (大阪市) の柳伊兵衛と共に担ったとあります。

明治７年 (1874)、現在の松原小学校が願正寺に開校しました。上田・新堂・立部(たつべ)・西大塚などの子弟が学びました。願正寺が江戸時代以降、地域のコミュニケーションの場であったからでしょう。

願正寺

32 上田村の福應寺

真宗大谷派　恵観と好楽社の「当知庵碑」　上田７

新堂２丁目の松原小学校や中央公民館の東側に商業施設が見られますが、その東接する上田７丁目に記念碑と２基の墓石が残る区画が設けられています。もともと小学校や公民館があるところは、下の池でした。江戸時代以降、東堤に接する松原の上田村には、真宗大谷派の福應寺が建っていました。いまでは、境内の大半は駐車場となり、建物は無くなっていますが、近くの同じ真宗大谷派の願正寺 (上田７丁目) 住職が代務者となっています。

福應寺旧地に残る石碑や墓石は、同寺住職たちの遺産です。記念碑の正面は「当知庵碑」とあり、裏面には「大正元年十一月建設」「好楽社有志者」と刻まれています。傍らの墓石は、江戸期のものと思われますが、２基とも剥落が激しく、年代ははっきりしません。「□(福)應寺墓」「釋尼妙智」「釋恵了」や「了順」などの文字が判読できます。

福應寺は江戸時代、東本願寺を本山としていましたが、東本願寺の直末ではなく、八尾の慈願寺の末寺でした。慈願寺の資料によると、本尊の阿弥陀如来像は、東本願寺 13 世の宣如によって、寛永 16 年 (1639) 夏に与えられました。「木佛尊〔ママ〕僧 河内国丹北郡松原庄上田村惣道場福應寺」「但シ御印書ニ者慈願寺下と有之候」とあります。そして、その宣如を祀るため、15 世の常如によって、寛文 13 年 (1673) 3 月 25 日、「宣如上人真影」が下されました。「慈願寺下河内国丹北郡松原庄上田村惣道場 福應寺常什物也」と見られます。続いて、16 世一如 (元禄 13 年・1700 年没) は、「親鸞聖人御影」や聖徳太子とインド・中国僧など「太子七高祖」像を下したとあります。

元禄５年 (1692)11 月の松原村の『寺社帳』によると、当時の住持 (住職) は、了玄で、境内は「東西拾間、南北拾三間五尺」とあります。本堂である道場と庫裏はわら葺き・瓦庇で、門は瓦葺きでした。寛永年間 (1624 ～ 43) に法珎が造立したとあり、以後、了雲・了嘉・了雲・了玄が住持として仕えました。

現在、願正寺には、福應寺に祀られていた阿弥陀如来像と喚鐘が移されています。このうち、喚鐘には「寛政四壬子年二月造之 惣門徒中 河州丹北郡松原村 上田福應寺 子栄代世 常什物也」と刻まれています。寛政４年 (1792) ２月、子栄住職の時につくられました。

幕末から明治時代になると、恵観が 40 年以上の長きにわたって住職を務めました。恵観は、八尾・北木の本の極楽寺 (真宗大谷派) から入寺しました。一方、俳句や冠句 (宗匠が出した句の上五句である冠に対し、中七字・下七字を付けて一句とするもの) にも堪能でした。恵観は三宅にあった冠句結社の好楽社に参加し、福應寺の一偶を当知庵と名付け、冠句サロンも催しました。

恵観は明治 44 年 (1911)、83 歳で亡くなりましたが、好楽社の同人たちは、恵観を偲んで翌大正元年 (1912)11 月、境内に「当知庵碑」を建立したのです。

福應寺

33 反正山村の善法寺

明教寺に安置する康雲の阿弥陀如来像　　上田５

にぎやかな河内松原駅前の中高野街道 (新道) を南へ５分も歩くと、西側に古い家並みが残る反正山の集落が見られます。ここは上田５丁目ですが、江戸時代には松原村上田の出戸 (出入口) にあたり、上田村とは別に反正山村ともよばれていました。いまも、反正山実行組合とか反正山水利組合の名称が使われています。

町の中央に、地蔵堂などが建つ広場があります。地蔵堂は、明治末年ごろまでは北西側にあった浄土真宗本願寺派の善法寺の門前に祀られていました。しかし、善法寺は 100 年ほど前の火事で焼け、いまでは廃寺となっています。地蔵堂には、反正山地蔵講が所蔵する「元禄八年九月七日　松原ノ内阿保茶屋村」と刻まれた鰐口があります。中高野街道と長尾街道が交わる地に集落を形成した阿保茶屋村 (阿保１・４丁目、上田１・２丁目) が元禄８年 (1695) につくったものです。

善法寺は、江戸時代前半の万治３年 (1660) 正月の『松原村宗旨改帳』に「西本願寺下久宝寺 永正寺旦那」とあります。惣道場として、西本願寺のもと、八尾市久宝寺にあった永正寺の下寺であったことがわかります。元禄５年 (1692)11 月の松原村『寺社帳』にも「浄土真宗西本願寺 久宝寺村栄正寺下 善法寺」と見られます。境内は東西６間 (約 11m)、南北６間。道場は梁行３間、桁行５間、わら葺き・瓦庇でした。山門は梁行５尺 (約 1.5m)、桁行８尺、瓦で葺いていました。庫裏もあり、梁行２間、桁行３間、わら葺き・瓦庇でした。

一方、西本願寺が所蔵する寛政４年 (1792) ごろの『河内国末寺帳』は「栄正寺下反正山村 善法寺」と記し、松原村ではなく、身近な

反正山村を使っています。

善法寺が上寺（うわでら）とした永正寺（栄正寺）は、創建時は八尾市福万寺（ふくまんじ）にありましたが、のち久宝寺に移ったものです。同寺は、江戸時代初期以降、同じ久宝寺にあり、中河内や南河内の寺院を支配していた顕証寺（けんしょうじ）のもとで組織されていた有力集団である「河内十二門徒」（のち十二坊）の１つでした。八尾をはじめ、東大阪・羽曳野・松原などの村々に多くの門徒を持っていました。反正山村もその１つでした。しかし、永正寺は江戸時代末期ごろまでに廃寺となったようです。

ところで、善法寺の本尊であった阿弥陀如来像と善法寺に下された浄土真宗開祖の親鸞（しんらん）聖人絵像や西本願寺 13 世良如（りょうにょ）上人絵像などは、いまでは永正寺廃寺後、反正山村の門徒を引き継いだ、同じ「河内十二門徒」の明教寺（みょうきょうじ）（羽曳野市島泉）に移されています。

明教寺に祀られる善法寺の阿弥陀如来像の足裏を調べると、ホゾ木に「河州（かしゅう）反正山村 善法寺 康雲（こううん）」と墨書されていました。康雲は、姓は渡辺氏。京都・岡崎に住む江戸時代前半の西本願寺所属の仏師で、各地で多くの仏像をつくっていました。明教寺には、西川村（羽曳野市恵我之荘）の旧教勝寺（きょうしょうじ）から移された阿弥陀如来像にも康雲銘が残されています。

善法寺址の地蔵堂広場　中央が地蔵堂

34 新堂・十二社権現社の鎮座

真言宗・観念寺と東之坊の祭祀　　新堂３

新堂３丁目の中高野街道と住吉道が交わる地に、天保５年 (1834) 建立の「かうや」道、すなわち、高野山 (和歌山県) をしめす道標があります。松原村新堂の地です。新堂村とも表記します。その東側に真宗大谷派の良念寺が建っていますが、門前東側には江戸時代までは真言宗の東之坊があり、境内に十二社権現社が祀られていました。東之坊は、上田７丁目の柴籬神社境内にあった観念寺の末寺でしたが、十二社権現の祭祀も行っていました。

元禄５年 (1692)10 月 25 日に書かれた松原村の『寺社改帳』があります。これによると、戦国時代の永禄年間 (1558 ～ 69)、観念寺と東之坊が建立されますが、この時、観念寺の住持 (住職) であった秀盛によって、東之坊境内に十二社権現社も祀られたのでした。

十二社権現とは、イザナギノミコトやイザナミノミコトなど紀州の熊野三山に祀られている天神７代、地神７代を祀ったものです。中世以降の熊野詣の無事を祈るため、参詣道沿いに熊野十二社権現の分霊が祀られました。同時に高野詣も盛んになりましたので、十二社権現が高野街道沿いでも信仰されていったのです。

『寺社改帳』には、「寺社改之節、大坂奉行所江上覧、広場山天神宮観念寺住持覚運。新堂村東之坊住持抱持」と上書きされていました。広場山天神宮、つまり現柴籬神社にあった観念寺の住職の覚運と東之坊の住職の抱持が、当地の寺社を支配する大坂奉行所に報告したものです。この『寺社改帳』をもとに、翌 11 月に松原村の『寺社帳』がまとめられ、松原村上田の庄屋宅に保存されていました。

『寺社改帳』によると、十二社権現社は、東西７間３尺、南北６間３尺の東之坊境内にあり、瓦葺きの門と木造鳥居が建っていました。しかし、慶長年間 (1596 ～ 1615) に災焼し、寛永年間 (1624 ～ 43) に再建されたと記されています。慶長 20 年 (1615) の大坂夏の陣で松原村などが戦場となっていますので、東之坊や十二社権現社も焼かれたのでしょう。この時、観念寺も焼失しています。

十二社権現社は明治以降、観念寺や東之坊が廃寺になったことから、新堂村の鎮守社として村人によって守られるようになりました。その後、中高野街道と住吉道が交わる先の天保５年建立の道標前にあった芝池氏宅に鳥居や本殿が移されました。

さらに、昭和 52 年 (1977) になって、現在の中高野街道新道のバス道側の新堂栄町会館が建つ、もと谷門の淵を埋めた児童公園内に移転したのです。いまでは、江戸時代半ばの寛保元年 (1741) ９月吉日と刻まれた石鳥居と一間社流造の本殿が建っています。

なお、観念寺は廃寺後、本尊十一面観音像や弘法大師像・不動明王像は、柴籬神社近くの上田７丁目の上田観音堂に移されています。同じように、東之坊の本尊であった地蔵菩薩像も西側の良念寺に預けられました。

十二社権現社

35 高鷲山と号する良念寺

17 世紀後半に寺観が整った市域の真宗寺院　　新堂３

中高野街道の旧道が走る新堂３丁目に真宗大谷派の高鷲山良念寺があります。室町時代の永正 12 年 (1515)11 月 28 日、良念寺の上寺であった慈願寺 (八尾市) の蓮西の願いによって、本願寺 9 世の実如より「木佛尊像」、つまり本尊の阿弥陀如来像が良念寺に下されました。この頃、良念寺が創建されたのでしょう。

江戸時代に入って、本願寺は東西に分かれますが、東本願寺を本山 (真宗大谷派) とするようになった良念寺には、寺観を整えるため、江戸時代前半の寛文年間に慈願寺の住職法円を通じて、本山から絵像などの申物が下付されました。本山からの『申物帳』には、寛文３年 (1663) ３月 27 日に宗祖の親鸞聖人絵像である「御開山様」が下付されたとあります。ちなみに、翌 28 日には近くの同じ真宗大谷派の願正寺 (上田７丁目) にも「御開山様」が下されています。

寛文７年 (1667) ３月 10 日には、「太子七高祖」が下されました。浄土真宗のお寺にお参りすると、聖徳太子や浄土教の七祖であるインドの龍樹・世親、中国の曇鸞・道綽・善導、わが国の源信・法然の七僧の絵像が掛かっているのを見られたことがあるでしょう。

『申物帳』に記された各寺院の下付年月をみても、江戸時代前半の寛永年間から寛文年間、つまり 1620 ～ 60 年代ごろが活発であることがわかります。この時期以降、市域の真宗寺院は現在と同じように寺観が整い、人々に信仰されていったようです。

良念寺には、のち宝暦３年 (1753) ４月５日にも、延享元年 (1744) に亡くなった東本願寺 17 世真如の真影が下付されています。

宝永(ほうえい)2年(1705) 6月に書かれた『松原村明細帳』によると、良念寺境内は東西13間、南北16間半を測りました。また、いまの上田・新堂・岡からなる松原村には11ヵ寺がありましたが、このうち、東本願寺(大谷派)の真宗寺院が6ヵ寺を占めています。

良念寺に東接して、真言宗の東之坊(ひがしのぼう)(廃寺)や十二社権現社がありました。現在、良念寺本堂の本尊阿弥陀如来像の横には、東之坊の本尊だった鎌倉(かまくら)時代のものと伝わる地蔵菩薩像が祀られています。

ところで、良念寺の山号はなぜ「高鷲山」なのでしょうか。山号は、地名の場合、おもにその所在地を示す意味でつけられます。例えば、反正(はんぜい)天皇のミヤコ跡と伝承される丹比柴籬宮(たじひしばがきのみや)があったと伝える上田の柴籬神社の近くに建つ願正寺の山号は「柴籬山」です。

現在、高鷲の地名は羽曳野市西部の町名や近鉄電車の駅名が残るように、新堂から東へ数kmも離れています。江戸時代、松原の村々の西本願寺派の寺とも関わった羽曳野市島泉の明教寺(みょうきょうじ)(浄土真宗本願寺派、旧高鷲村)の山号も高鷲山です。良念寺は創建以来、寺地を動いた記録がありません。松原地域の一部も、ある時期、高鷲とよばれていた可能性もあります。その範囲は、いま以上に広かったのかもしれません。

良念寺

36 阿弥陀如来となった浄光寺・旅休

松原村新堂の融通念仏宗　　新堂３

新堂３丁目に融通念仏宗の浄光寺が建っています。前を走る道は中高野街道です。河内松原駅から岡の松原南小学校方面に向かうバス道を中高野街道と思っておられる方も多いと思います。この道は、大正時代に三宅方面からのルートを変え、新しく直進させた新道です。本来の中高野街道は、松原幼稚園や松原小学校を経て、新堂の集落を通っていました。寺の西・南側の屋敷林で囲まれた住宅は、新堂の庄屋で、明治時代の初代松原村長となった芝池経太郎家です。

浄光寺は、鎌倉時代末期の元亨２年 (1322)、大念仏寺 (大阪市平野区) を総本山とする融通念仏宗を中興した法明が各地を布教して、念仏勧進道場として開いたと伝えています。しかし、この念仏道場は、室町時代の永正元年 (1504)10 月に焼失していました。

これを、江戸時代の元和８年 (1622) に再建したのが、旅休でした。旅休は、生誉上人とよばれ、もともとは浄土宗の僧侶でしたが、江戸時代の初めごろ融通念仏の教えに帰依したのでした。

旅休が寺を守るようになって、浄光寺の名も与えられ、融通念仏宗の中本山である丹南の来迎寺の末寺となりました。寛文６年 (1666)10 月８日の『河州丹南郡丹南村来迎寺末寺御改帳』には、「河州丹北郡新堂　浄光寺　生誉　茂兵衛」とあり、生誉の名と共に檀家を代表する茂兵衛の名も見られます。

のち元禄５年 (1692)11 月の松原村の『寺社帳』に、寺の境内は東西四間 (約７m)、南北拾三間半 (約 24m) とあります。本堂は阿弥陀堂とよばれ、わら葺きで庇だけは瓦で葺いていました。阿弥陀

如来像を本尊としています。再建以来、生誉 (旅休) が住職でしたが、いまでは海深が務めていることも述べています。旅休は、60 年近く浄光寺を守ってきましたが、13 年前の延宝 7 年 (1679)11 月 6 日に亡くなっていました。『寺社帳』は、旅休長老と敬称しています。

現在、本堂横に石造の舟型光背を持つ阿弥陀如来立像が立っています。実は、この像が旅休の墓として祀られています。浮彫りされた阿弥陀如来を旅休に見たて、向かって右側には「生誉上人旅休大和尚」、左側には命日の「延宝己未十一月六日」と刻まれています。ふつう、僧侶の墓は無縫塔 (卵塔) とよぶ卵型が多いのですが、旅休は仏として祀られました。珍しいだけでなく、石造遺物としても貴重なものでしょう。

山門を入った右側に「栄和地蔵尊」とよばれる石造地蔵菩薩像も祀られています。夜泣きを直すお地蔵さんとして、地元の人々に信仰され、香華が絶えません。

いまの本堂や山門は、寺に残る棟札や『本堂再建寄付帳』から、天保 2 年 (1831) に建てられたことがわかります。新堂の檀家で代々、医家であった、井岡氏や伊藤利助という棟梁大工などが、寺の維持や建設にあたりました。

浄光寺

37 王仁の聖堂址伝説

学問の興隆を期待した河内の人々　　岡 1

松原の伝説のなかで、古代史上、有名なものの 1 つに王仁の聖堂の言い伝えがあります。

『日本書紀』によると、15 代応神天皇のころ、朝鮮半島の百済から学者の王仁が大和王権に招かれました。王仁は応神天皇の皇子である菟道稚郎子の師となって、皇子に典籍を教えたとあります (応神天皇 16 年条)。一方、『古事記』では、王仁は和邇吉師と記され、孔子の『論語』10 巻、『千字文』1 巻を貢進したと記されています。

王仁の渡来は 4 世紀後半ごろと思われますが、『日本書紀』や『古事記』とも、王仁は西文氏の祖と伝えています。西文氏は 5 ～ 6 世紀半ばにかけて大和王権の中で文筆専門の氏族として活躍しました。現在の羽曳野市古市に居住し、いまも法灯を掲げる西琳寺 (古市 2 丁目) を氏寺としていました。

江戸時代以後、儒学が盛んになるにつれ、王仁はわが国学問の祖としてあがめられるようになりました。とくに、大阪は王仁に関する伝承が多く、枚方市藤阪には王仁墓が建てられています。また、大阪市北区大淀南 (もと大淀区大仁町) には王仁を祭神とする八坂神社が鎮座しています。高石市の高石神社も元来は王仁を祀っていました。

江戸時代の享保 20 年 (1735)、幕府の儒者の並河誠所は、河内の旧跡を踏査して『河内志』を著しました。丹北郡の項に「聖堂池は新堂村にある。父老が言うには、池の傍らにかつて聖堂があったので池名となった。いま宗像を安置した祠が祀られている」と書かれています。

聖堂池は、いまでは清堂池と書き、岡 1 丁目に所在します。池は

中堤で分けられ、西側を清堂池、東側を宮ノ池とよんでいます。池の南側は、埋めたてられて松原第六中学校が建っています。六中前は、池に突き出た岬状となっており、そこに出岡弁財天が祀られています。池の南側すぐのところには、難波と大和 (飛鳥) を結んだわが国最古の官道の 1 つといわれる丹比道 (竹内街道) が走っています。

『河内志』にいう祠とは、いまの出岡弁財天を指すと思われます。慶長 20 年 (1615) の大坂夏の陣で祠 (「弁才天女」) は焼かれましたが、寛永年間 (1624 ～ 43) に再建されたと松原村『寺社帳』(元禄 5 年 -1692 年 11 月) にあります。清堂池の所在する出岡は岡の分村ですが、同池は新堂の水田灌漑用として活用されています。

聖堂は、孔子を祀る堂です。わが国で孔子を祀ることが始まったのは大宝元年 (701) のことといわれ、王仁が出岡に聖堂を建てた事実は不確かです。しかし、河内に聖堂が建てられたと江戸時代以後、伝えられてきた背景には、当地の人々が河内に教育者王仁を顕彰し、学問を広めたいという願望があったからではないでしょうか。

清堂池から西南一帯は、清堂遺跡とよばれる旧石器時代から近世に至る複合遺跡です。市内でも、最も古くから開けた地域の 1 つなのです。

出岡弁財天

38 河内鋳物師の工房

岡遺跡の発掘　　岡２

市域南部の岡・立部・丹南から堺市美原区および東区のあたりは、河内鋳物師とよばれた職人集団の居住地として有名です。

河内鋳物師は、平安時代末期から鎌倉・室町時代にかけて、全国に出向いて梵鐘や大湯船を鋳造したり (廻船鋳物師)、鍋・釜・鍬・鋤などの製品を作り (土鋳物師)、売り歩いていました。彼らの足跡は、全国に残る「大工河内国丹南郡」などと記された梵鐘銘によってよく知られています。

美原区真福寺・太井・余部や東区日置荘の各遺跡が発掘され、河内鋳物師の生産活動や暮らしぶりがわかってきました。本市でも中央環状線沿いの立部２丁目地内や竹内街道に面した市営柏木住宅地 (立部５丁目) の立部遺跡、そして岡２丁目の岡遺跡などで鋳造に関わる遺構や遺物が見つかっています。柏木住宅前には、竹内街道開通 1400 年記念の『緑の一里塚」第１号モニュメントも建っています。

このうち、岡遺跡は平成４年、府営松原岡住宅の建て替えに伴い、大阪府教育委員会によって調査されたものです。河内鋳物師の工房跡が、平安時代末期から室町時代後半 (12 ～ 15 世紀) にかけて確認されました。とくに遺構の中心は、河内鋳物師が源平合戦の戦乱で焼かれた奈良・東大寺の大仏の首を修復して脚光を浴びた鎌倉時代前半 (13 世紀初め) にあたります。

調査地区では、銅や鉄の塊を溶かすための「こしき炉」とよぶ溶解炉が２ヵ所見つかりました。これは、地面に浅い穴 (直径 0.9m、深さ 0.2m) を掘ってモミ殻などを混ぜた粘土を張りつけ、炉壁や

底をつくったものです。炉内には、溶けた銅や鉄の残りかすがアメ状に固まっていました。

地上部の炉壁には、「ふいご」からの送風管を取りつけた穴が１ヵ所残っており、鋳型を設置した土坑（どこう）２ヵ所も見つかりました。

ほかにも、鉄を溶解する過程で生じる不純物の鉄滓（てっさい）を集めて捨てた直径２m、深さ 0.7m 以上の土坑も全国で初めて検出されました。捨てられた鉄滓は、3.6t にもおよんでいました。

岡の工房では、鋳型の厚さや湾曲の度合いから、梵鐘や大型の鍋・鉄瓶・茶釜などを大規模に鋳造していたことが予想されます。

鋳造遺構の南側から南北 20m、東西５m におよぶ２間×９間の大型建物跡も検出されました。調査地周辺の岡は、新堂・上田と共に当時、京都・広隆寺（こうりゅうじ）(右京区太秦（うずまさ）) が所有する松原荘でした。広隆寺文書には、「松原荘の鋳物師の年貢が免除されていた」(宝徳（ほうとく）３年 (1451)・享徳（きょうとく）元年 (1452)・享徳２年) と記されています。このことから、この大型建物は荘園に関わるものとも考えられ、河内鋳物師が松原荘の庇護を受けていたと想像されます。

現在、府営住宅の北側緑地帯に「岡二丁目所在遺跡」(調査時点の遺跡名称) の説明板が建っています。

岡遺跡の説明板

39 西蓮寺から出岡公民館へ

出岡の真宗大谷派　公民館安置の阿弥陀如来像　　岡２

河内松原駅方面から来た中高野街道が新堂３丁目の融通念仏宗・浄光寺前を通り、岡の集落に入る手前に出岡公民館が建っています。そこは岡２丁目ですが、岡の本村からは出入口的な性格を持っていましたので、出岡とよばれてきました。昭和前半ごろまで、岡とは田畑で隔てられており、出郷として集落がまとまっていました。

歴史的には、14 世紀前半の南北朝時代、北朝方の丹下氏が松原荘に松原城をつくったのですが、松原城は、別に剰我城ともよばれていました。松原荘は、岡・新堂・上田の３村がまとまって形成された大村ですので、この剰我が、出岡の地名の初見かもしれません。反対に、出岡の名が残ることから、剰我城を出岡に比定するほどです。

いまでは、岡と出岡の旧集落の間にはびっしりと住宅が建ち、区別がつきにくくなっていますが、出岡公民館は一般の建物とは違い、屋根に一対の鴟尾を設けた寺院建築をとり入れています。では、なぜ出岡公民館が寺院様式なのでしょうか。それは、ここに西蓮寺という真宗大谷派（東本願寺が本山）の寺が江戸時代にあったからです。

公民館の中に入ると、奥は寺の内陣となり、正面に「西蓮寺」の額と共に喚鐘や、宮殿に祀られた本尊の阿弥陀如来像が立っておられます。同寺は近代に入って廃寺となりましたが、出岡の檀那寺として、何百年にもわたって、人々の信仰を守ってきました。

西蓮寺は、江戸時代前半の元禄５年 (1692)11 月に出された松原村の『寺社帳』に、次のように記されています。

「浄土真宗東本願寺堺御坊末寺、西蓮寺、看坊春了」

「境内 東西四間、南北拾間弐尺」

「道場 梁行弐間、桁行五間 瓦葺」

「庫裏 梁行壱間半、桁行弐間 瓦葺」とあります。

つづいて、「右之道場往古ゟ有来り、開基年暦　知レ不申、代々看坊ニ持せ来り候」と見られます。

つまり、瓦葺きの本堂である道場と住職の看坊が住む瓦葺きの庫裏が建っていました。また、創建年はわかりませんが、古くから同地にあり、住職が住んでいたとあります。この時は、春了が寺を守っていました。東本願寺を本山とする浄土真宗ですが、堺御坊 (現難波別院堺支院、堺市堺区) の末寺であったこともわかります。

公民館入口の西側には、地蔵堂も見られます。中には、地蔵菩薩像が光背に浮彫りされ、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ通例のお姿で祀られています。

光背には「釋覚智」「享保廿乙卯年三月十一日」と刻まれています。江戸時代中ごろの享保 20 年 (1735) 3 月 11 日に造立されたもので、覚智という人が関わりました。光背の上部が少し欠損していますが、西蓮寺に付随するお地蔵さまとして、いまも信仰をうけています。

西蓮寺跡の出岡公民館

40 歴史街道としての竹内街道

最古の官道から江戸～大正時代の信仰・商業の道　　岡５

岡５丁目に建つ岡公民館は、昭和 58 年に増池の西半分を利用してつくられたものです。また、池の東側は埋めたてられ、岡公園になりました。道をはさんだ南側にも、昭和 48 年まで新池が水をたたえていましたが、いまでは宅地化されています。この２つの池の間を東西に走っている道が竹内街道で、わが国の古道の１つとして有名です。

竹内街道は、『日本書紀』推古天皇 21 年 (613)11 月の「難波より京に至る大道を置く」の記述の道とも考えられ、当時は丹比道とよばれていたともいわれています。堺市堺区の大小路から東南に向かい、北区の金岡神社付近で、天美西で発掘された南北に走る難波大道と交差したと考えられます。西除川を渡ると、市域に至ります。岡の町並みを進み、立部の南部を横切り、羽曳野市古市を経て、太子町二上山の南で竹内峠を越えて大和に入ります。葛城市の長尾神社の北側で長尾街道と一緒になり、大和の古道である横大路と接続したようです。

ただ、竹内街道は「最古の官道」といわれて、古道のイメージが強いのですが、いまのところ、市域では古代にさかのぼる道路遺構や遺物は検出されていません。

江戸時代以降、竹内街道をはさんで新池・増池が見られました。「新」や「増」の池名から、江戸時代半ばまでに新しく２つの池が掘られたのでしょう。宝永２年 (1705) ６月の『河内国丹北郡松原村明細帳』に「新池 長六拾三間、横五拾六間三尺」「今池 長三拾五間、横六間」とあります。今池は増池のことで、これまで岡の田畑を潤していた菅池 (堺市美原区大保) だけでは水が不足していったのです。

古道も人々の往来の増加と共に整備されていきました。岡では南北に走る中高野街道を起点に、西に入る道を北から円正寺前を北筋、泉福寺前を中筋といい、竹内街道を茶屋筋とよんでいました。

竹内街道が茶屋筋とよばれるわけは、大坂から中高野街道を通って狭山や高野山 (和歌山県) に行く人々や、堺から竹内街道を利用して葛井寺・道明寺 (藤井寺市) や聖徳太子の墓のある上ノ太子 (太子町)、遠くは伊勢神宮 (三重県) にお参りする旅人や商人のための茶屋や宿屋が両道の交差するあたりに建っていたからです。

明治時代には、小野屋・柳屋・かごや・月之屋・丸万・太刀屋などの店があり、松原茶屋とよばれたそうです。大正 3 年 (1914)7 月に開店した更池銀行 (のち、三和銀行へ) 松原支店も、竹内街道と中高野街道の西北角にあり、モダンな大正建築として異彩をはなっていました。

しかし、近鉄電車が大正 12 年 (1923) に阿部野橋から河内松原を経て道明寺駅方面と結ばれたことから、徐々に街道の往来は減っていきました。

松原市は、歴史街道としての竹内街道を広く知ってもらえるよう、岡公園内に立派な記念碑を建てています (平成 24 年 3 月建)。

竹内街道の記念碑

41 中高野街道に息づく大師堂

空海を慕い、信仰を続ける岡観音講の人びと　岡５

天皇や上皇をはじめ、京都の貴族や僧侶たちは、平安時代後半から、空海 (弘法大師) が眠る高野山 (和歌山県) に参拝するようになりました。久安４年 (1148) ６月、仁和寺の覚法法親王は高野街道を通って高野詣をする途中、松原庄で一泊しています。松原庄は、上田・新堂・岡の地です。この松原庄の名が、市名「松原」の初見です。

同道は、大阪市平野区から三宅・阿保・上田・新堂・岡・丹南を南北に結び、中高野街道と称しています。高野山へは、生駒山麓の東高野街道や堺を通る西高野街道、あるいは天美や布忍を通る下高野街道も利用されました。ただし、東・中・西・下という名称は明治時代以降に定着してきました。江戸時代は、高野道とよんでいたようです。

江戸時代後半ごろから、庶民の旅が盛んになりました。中高野街道は、平野区の杭全神社の近くにあった一里塚を起点としています。三宅と阿保の境にあった阿保浄水場の南側に以前、一里塚がありました。平野から一里 (約４km) の距離を測り、江戸時代の絵図には小山が描かれ、一里山という小字も残っています。ここから南に行くと、阿保と上田を分ける長尾街道に交差します。堺方面からの旅人で賑わいましたので、茶屋が設けられ、阿保茶屋とよばれました。

河内松原駅西側から松原小学校前や新堂集落をなおも南下すると、岡５丁目の竹内街道と交わる松原南図書館前に出ます。入口には、寛政９年 (1797) ６月、「いせこう中」が建てた「左さやま　三日市かうや道」「右ひらの　大坂道」「左さかい道」と刻まれた道標があります。ここも、松原茶屋とよばれました。なお、中高野街道はこ

こから交差する竹内街道を東へ重なって少し行くと、同じく寛政９年、伊勢講が建てた「左　ふちゐ寺　上太子　やまと道」「右　さやま　（三日市）　こうや」「左　ひらの　大坂道」の道標があります。

反対の西の堺へ向かう竹内街道を 200m ほど行くと、空海を祀る大師堂 (岡５丁目) が建っています。もともとは増池の東畔にありましたが、池の半分は埋められ、岡公園となっています。

大師堂の創建は明治時代のことですが、高野山大円院より招請したという空海坐像・不動明王立像・板彫千手十一面観音立像が安置されています。密教様式の厳しい表情が特徴です。境内には、明治 43 年 (1910) ４月に岡の人々と大阪の明治組が奉納した石造不動明王立像や、室町時代の石造阿弥陀如来坐像２体も祀られています。

大円院と関わりがあるのは、大師堂に長く住持した神田覚栄 (正寿院大法師) が大円院で修行をされたからです。覚栄は、幕末の嘉永５年 (1852) 生まれ。昭和 18 年 (1943) に亡くなるまで、大師信仰を支えてきました。覚栄の永代供養が大円院で行われています。

以後、大師堂は岡の観音講によって守られています。毎年４月 21 日の大祭には大円院で修行された僧侶がこられ、護摩が焚かれて、大いににぎわいます。

大師堂

42 向福寺から円正寺へ

三河・源徳寺　小土山から信道山へ　　岡５

岡５丁目の中高野街道を西に入った北筋に、東本願寺を本山とする真宗大谷派の信道山円正寺が建っています。もともとは、羽曳野市南恵我之荘や立部・西大塚地区の小土墓地東側に創建されていました。

奈良時代、行基作の本尊を祀ったという伝承を持ち、小土山向福寺とよばれました。寺推定地からは、室町時代 (15 世紀) から江戸時代前半の遺構や遺物が見つかっています。

延宝５年 (1677)10 月７日に調べられた円正寺の『本尊録』によると、火災に遭った同寺を寛永年間 (1624 ～ 43) に、住職の正善が小土から現在地の松原村岡 (岡村とも表記します) に移して再建し、小土山の山号はそのままに円正寺と号したと伝えています。火災は、慶長 20 年 (1615) の徳川方と豊臣方との大坂夏の陣によって戦場となったからでしょう。本堂に祀られている本尊の阿弥陀如来立像には焼けた痕跡が見られますが、これはこの時の被害によると伝えられています。

本山の東本願寺から末寺に免許下付された記録帳である『申物帳』に、円正寺に寛文２年 (1662) ２月２日、東本願寺 13 世宣如の絵像が下されたことが見られます。また、同３年６月 10 日に「御開山様」の親鸞聖人絵像が下され、同６年 12 月 15 日にも、聖徳太子などの「太子七高祖」が下されました。

その後も、円正寺は元禄５年 (1692)11 月の松原村の『寺社帳』に「東本願寺堺御坊末寺」とあり、境内は東西六間、南北拾三間二尺でした。本堂や庫裏がわら葺きで、庇だけが瓦葺きであること、山門は瓦葺きであることも記しています。

先の『本尊録』は、寺が小土から岡に移った寛永年間に正善が中興初代住職となった後、正月を経て、２代正善が延宝５年に調べたものを元禄５年 11 月に、時の住職の清岸が写したものです。とくに、興味深いのは２代正善が三河 (愛知県) の吉良 (西尾市) にある同じ真宗大谷派の源徳寺の僧で、同寺から円正寺に入寺したことです。

山号にこだわりますが、『本尊録』が書かれた延宝や元禄期の 17 世紀末には、まだ、小土山の山号でした。しかし、天明８年 (1788) の過去帳には「信道山円正寺　所持」とあり、18 世紀後半に、いまの信道山の山号に変わっています。実は、信道山こそ正善の前住寺院である源徳寺の山号でした。

源徳寺は「忠臣蔵」で知られる吉良上野介の領地でした。また、幕末の慶応２年 (1866) に伊勢神戸 (三重県) の荒神山の血闘で亡くなった任侠の吉良仁吉の墓があることでも有名です。仁吉墓は、清水次郎長が仁吉の一周忌に菩提寺の源徳寺に建てたものです。

円正寺の檀家たちは、文政５年 (1822) ５月、円正寺歴代住職の墓を岡の共同墓地である浄土寺墓地 (堺市美原区大保) に建てました。墓地北側の中央にある墓石には、正面に「円正寺墓」、基礎石に「寺子中」とあります。

円正寺

43 泉福寺の文化財

松原村岡の真宗大谷派　本尊・絵像・欄間・地蔵像　　岡５

中高野街道から中筋を西に入った岡５丁目に、東本願寺を本山とする真宗大谷派の泉福寺が建っています。寺伝によると、室町末期の弘治元年 (1555) ９月 27 日に亡くなった頓法を開基としています。

江戸時代前半、東本願寺が末寺へ免許下付 (授与) した『申物帳』には寛文２年 (1662) ７月８日、「河州丹北郡松原庄岡村 泉福寺 良春」に「御開山様」、すなわち当時の７代住職良春に宗祖の親鸞聖人の絵像が与えられたと記しています。さらに、寛文 10 年 (1670) ３月５日には、聖徳太子など「太子七高祖」の絵像も下されています。いまも本堂には、これらの絵像が掛けられ、下付した東本願寺 14 世琢如の花押 (書判) を持つ裏書が見られます。

このことから、寛文期ごろに泉福寺がこれまでの道場から、いまのような寺院としての体裁を整えていったことがわかります。『申物帳』に本尊の木仏の記載がありませんが、現在、本尊として祀られている阿弥陀如来立像は、鎌倉時代様式を持つ写実的な一木造の古仏です。他寺で祀られていた阿弥陀仏が泉福寺に迎えられたとも考えられます。

泉福寺は、元禄５年 (1692)11 月に書かれた岡・新堂・上田から成る松原村の『寺社帳』に、「浄土真宗東本願寺堺御坊末寺」とあって、「境内東西拾間、南北拾三間半」と記されています。本堂にあたる道場や庫裏・山門は瓦葺きとあり、これは慶長 20 年 (1615) の大坂夏の陣によって、松原地方が戦場化して焼失したのち、寛永年間 (1624 ～ 43) に再建されたものです。この時の住職は、８代良玄でした。

元禄期、泉福寺は現在の殿馬場中学校 (堺市堺区) 近くにある堺

御坊 (難波別院堺支院) の末寺でした。松原村では、円正寺 (岡)・西蓮寺 (出岡)・願正寺 (上田) も堺御坊の末寺になっていました。

寛永年間に再建された本堂は、11 代住職幸存の文化 7 年 (1810) に再び建て替えられました。いま見る本堂がそれですが、この時、檀家として特に力を入れたのが岡村の山田定右衛門、仁左右衛門親子でした。定右衛門は、文政 2 年 (1819) にも石灯籠を寄進し、いまも本堂前に建てられています。

本堂に上がると、内陣と外陣を分ける欄間が目に入り、鳳凰をあしらった見事な彫り物が施されています。その下部裏側に墨書銘があり、「寄進 貞享三年□□□ 施主田守十兵衛」と読めます。文化期の本堂ですが、貞享 3 年 (1686) に使われていた古材の欄間をはめこんだのです。施主の田守氏は岡村の分村である出岡村の檀家でした。

山門前の地蔵堂に祀られている 3 体の石仏も大切にされています。このうち左右 2 体の地蔵菩薩像は通例の左手に宝珠、右手に錫杖を持つお姿です。とくに、左側の像の光背には「正徳三巳五月三日」と刻んでおり、正徳 3 年 (1713) に亡くなった童子のためにつくられました。毎年 8 月 24 日の地蔵盆には、本堂に移され、お参りを受けています。

泉福寺

44 正井殿の「連理の松」

縁結びや安産を願い信仰された神木のマツ　　岡３

連理の松　丹北郡松原の庄　間西天の神木也

狂歌　　利光

○しなたれるひよく連理の松か枝に人目も恥もしら藤の花

同　　松緑

○葉をしきてふたりねせしハこれそこの連理の松のあれはなりけり

○巣やかけん比翼連理の松の枝　意朔

○契り来なけ連理のまつそ郭公　如貞

○心かハりするな連理の松の色　器水

これらの狂歌や俳諧は、延宝７年 (1679) に出版された『河内鑑名所記』に収められたものです。同書は、河内柏原の三田浄久が河内国で見聞した名所・旧跡に関する伝承や由来を地誌の形にしたものです。そこには、同地を訪れた人々の狂歌や俳諧を紹介しています。

そのうちの１つに、丹北郡松原庄にある間西天の神木「連理の松」がとりあげられているのです。松原庄は、現在の上田・新堂・岡の地域にあたり、間西天はいまの岡３丁目の松原南小学校前に鎮座する正井殿をいいます。素盞嗚命を祭神とし、岡と立部地区の人々に信仰されていました。一時期、竹内街道沿いにも祀られていましたが、村々で病気がはやったということで再び旧地に戻っています。その際、正井殿の常夜燈の一部が近くの真宗大谷派の円正寺本堂前の庭に移されています。なお、明治７年 (1874) の『壱村限取調帳』に、正井殿は反正天皇が丹比柴籬宮で玉水を汲んだ井戸跡だと伝えています。

この正井殿の境内に、江戸時代前半ごろ「連理の松」とよぶ河内

でも評判のマツが見られたのです。「連理」とは１本の木の枝が他の木の枝につき、１本の木のようになることです。歌にある「比翼」は「連理」と結びついて「比翼連理の契り」ということばになって、男女・夫婦の仲がきわめて親密なことのたとえに使われています。そこから、縁結びや安産の神木として崇拝されるようになりました。

正井殿の「連理の松」を詠んだ利光は大和宇陀郡（奈良県）の久野氏、松緑は大坂の小野氏、意朔は大坂の伊勢村氏、如貞は大坂の井口氏、器水は河内石川郡の人であり、各地から神木を愛でに訪れています。

松原市緑化協会は市内社寺林の調査を行っていますが、その中で正井殿はマツを主体とする単木型景観林で、直径 40cm 前後のクロマツも４本生育していることが報告されています（「緑と花」昭和 55 年 13 号、平成４年 37 号）。江戸時代の神木「連理の松」は、すでに枯れて現存しませんが、当時の松林の景観が今日まで受け継がれているといえるでしょう。本市は、マツが長寿や節操を象徴する木であることや松原庄の地名から、マツを市木に選定しているほどです。

研究団体の松原の郷土を知る会も、市内の樹木を調べた冊子『松原の樹木』とマップの『まつばら歴史さんぽ樹木紀行』を発行しています（2015 年３月）。

正井殿

45 栄久寺にあてた教如の決意

大坂合戦で徹底抗戦した若き教如の檄文　　立部１

元亀元年 (1570) ９月 12 日夜半、大坂の石山 (現大阪城内および周辺) にある本願寺の拠点であった大坂本願寺の鐘が鳴り響きました。これが天下人をめざす織田信長と本願寺との 11 年にもわたる、いわゆる大坂合戦の幕開けでした。当初は一進一退でしたが、やがて大坂本願寺側が不利な状況に陥りました。

天正８年 (1580) ３月、本願寺 11 世顕如は信長と和睦し、顕如は７月に大坂本願寺を退出することになりました。ところが、顕如の長男である 23 歳の教如が籠城を主張したことから、顕如だけが４月９日に大坂を出て、紀州の鷺森 (和歌山市) に退いたのです。

教如は以後も徹底抗戦をよびかけ、約４ヵ月間、本願寺にとどまりました。しかし、ついに８月２日、本願寺に火を放って大坂を脱出して同じく紀州の雑賀 (和歌山市) に向かったのです。

脱出１ヵ月後の９月６日、教如は一通の檄文を立部村の栄久寺に送りました。それは、河内国の坊主衆や門徒衆にあてたものです。

その内容を要約しますと、

「(天正８年) ８月２日、大坂を退出して雑賀におります。このたびのことは残念ですが、出城の破却もやむをえないことです。私のことは気づかいいりません。みなさんがそれぞれ法義を行い、今後とも宗門を守ることを、ただ頼むだけです」

とあり、苦しい心境がつづられています。教如は天正８年から翌９年にかけて、こうした檄文を各地に出しました。しかし、いまのところ、河内ではこの栄久寺文書しか見つかっておらず、寺宝とし

て大切に残されており、松原市指定有形文化財となっています。

栄久寺は、立部１丁目にあります。山号を願成山（がんじょうざん）といい、真宗大谷派ですが、もともとは真言宗で観音寺とよばれていました。戦国時代の明応（めいおう）年間 (1492 ～ 1501)、本願寺８世蓮如（れんにょ）の布教によって浄土真宗に改宗し、栄久寺と名を変えました。

寺伝によれば、教如の脱出に際し、栄久寺住職の良円（りょうえん）は門徒の人たちと共に支援を惜しまなかったといいます。このことから、教如が手紙を栄久寺に出したと思われます。

教如はのち本願寺 12 世を継ぎますが、まもなく隠居を余儀なくされ、慶長（けいちょう）７年 (1602)、東本願寺を創立してその初代となります。栄久寺は、教如との関わりから東本願寺を本山と仰ぐのです。

栄久寺本堂には、本願寺 15 世常如（じょうにょ）が延宝（えんぽう）５年 (1677) に下した本尊の阿弥陀如来像が祀られています。その両側には、「教如上人真影」と共に宗祖の親鸞（しんらん）聖人絵像も祀られていますが、これらはすでに本願寺 14 世の琢如（たくにょ）が万治（まんじ）４年 (1661) に下付したものです。

同寺には、戦国時代の本願寺９世実如（じつにょ）が書写したとされる「南无不可思義光如来（なむふかしぎこうにょらい）」の九字名号と「南無阿弥陀仏」の六字名号も伝えられています。

栄久寺

46 来迎寺と法明上人

丹南に広まった融通念仏の教え　　丹南３

融通念仏宗は、平安時代後半の天治元年 (1124) に京都・大原 (左京区) の天台僧、良忍によって開かれました。良忍が大治２年 (1127)、摂津の平野 (大阪市平野区) に建てた大念仏寺を総本山としています。

天承元年 (1131)、良忍は念仏の教えを広めるため、市域南端の丹南３丁目に阿弥陀如来像を安置する堂を建て、融通念仏十ヶ郷辻本大勧進阿弥陀寺と号しました。

時の鳥羽上皇や崇徳天皇は、良忍に帰依していたことから、融通念仏の教えは各地に広まったのでした。しかし、良忍の死後は衰退し、大念仏寺や阿弥陀寺などの堂塔も壊廃していきました。

鎌倉時代末期、そこに現れたのが法明でした。法明は、元亨元年 (1321)、大念仏寺７世となり、融通念仏宗を復興しました。続いて法明は、良忍の聖跡と伝える阿弥陀寺が荒れるのを惜しみ、近くの菅生神社 (堺市美原区菅生) より感得した阿弥陀如来画像を勧請して、同寺を中興したのです。そして、正中元年 (1324)、阿弥陀寺から河内十箇郷六本別寺諸仏山護念院来迎寺と寺号を改めました。この再建時に植えられたのが、客殿の庭に見られる樹齢 600 年といわれる大阪府指定天然記念物のイブキの木と伝えられています。

この時、法明は来迎寺中興と共に、法明寺 (大阪市平野区喜連)、良明寺 (奈良県生駒郡平群町久安寺)、極楽寺 (河内長野市古野)、大念寺 (南河内郡河南町大ヶ塚)、高安寺 (八尾市水越) の各寺も開基したのです。のち、これら６ヶ寺は融通念仏宗の中本山となりました。

来迎寺は江戸時代以降、河内国丹北・丹南・八上郡、および摂津

国東成・西成・百済・住吉郡にある 36 ヶ寺をまとめたのでした。来迎寺には、法明の大衣が寺宝として残されています。また、境内墓地には法明の供養塔が歴代住職の墓塔と並んで祀られているのです。

現在、来迎寺東側の商業施設が建っている地が発掘されています。そこは、江戸時代、高木氏の丹南藩 1 万石の陣屋のあったところです。調査では、陣屋遺構と共に、その下層から室町時代後半の「来迎寺」と刻した軒丸瓦と鬼瓦が検出されました。このことから、江戸時代、陣屋の建設に伴い、寺域が西に移動した可能性があります。以後、来迎寺は高木氏の菩提寺として信仰を受けてきました。

融通念仏宗は河内や摂津・大和で隆盛をみましたが、総本山の大念仏寺の上人 (貫主) に松原出身の僧が 3 人も名をとどめています。室町時代の大永元年 (1521) に 29 世となった三宅村の法融上人。続いて享禄 2 年 (1529) に 30 世となった丹南村の道阿上人。桃山時代の文禄 5 年 (1596) に 34 世となった布忍・高木村の宗圓上人です。

なお、来迎寺本堂は現存する江戸時代前半の承応 2 年 (1652) の棟札から、その時に再建されていることがわかり、市域最古級の寺院建築です。江戸時代、融通念仏宗の中本山として格式を持った堂々とした建物です。

来迎寺

47 高木氏と丹南藩１万石

丹南に陣屋をおいて藩庁所在地とする　　丹南３

譜代大名、高木氏の丹南藩１万石の陣屋が丹南３丁目に置かれていました。大坂の陣 (1614 ～ 15) で戦功のあった徳川氏直臣の高木正次が元和９年 (1623) に初代丹南藩主となって以後、高木氏は、おもに主水正を名のり、明治４年 (1871) の廃藩置県まで 248 年間にわたって藩政を継続しました。正次が大坂の陣で、豊臣方の真田幸村から戦利品とした六文銭印の手桶と杓子が来迎寺に蔵されています。

丹南藩の領地は、江戸時代後期には松原市域の丹南、向井・清水・高木 (新町地区)、堀・池内 (天美地区)、一津屋や羽曳野市・藤井寺市・八尾市・堺市・大阪狭山市・堺市美原区の河内国丹南郡 14 ヵ村、丹北郡６ヵ村、志紀郡２ヵ村の計 22 ヵ村に広がっていました。

高木氏は三河国碧海郡 (愛知県)、いまの安城市高木町の出身で、正次の父の清秀が徳川家康のもとで武功をあげました。高木町には安城市史蹟に指定された「高木城跡」の石碑と「高木清秀邸址」の案内板が建っています。高木町から東へ１km ほどの岡崎市大和町にある妙源寺 (浄土真宗) は家康が信仰した寺として有名です。ここに同寺門徒の清秀、正次、子の正成 (２代丹南藩主) の墓石が祀られています。

しかし、家康が天正 18 年 (1590) に豊臣秀吉から関東８ヵ国を与えられたのを機会に、清秀も家康に従い、相模国 (神奈川県) に移りました。高木氏は現在の海老名市に含まれる中新田など３ヵ村をおさめ、正次が丹南へ国替えになるまで中新田に館をおきました。高木氏は初代正次以下、13 代正坦まで続きましたが、６代正陳の元禄年間以後は参勤交代の義務を免ぜられ、藩主は江戸定住となりました。

陣屋は、府道中央環状線の南側で、東は中高野街道、西は菩提寺である融通念仏宗の来迎寺に接していました。陣屋南側中央は、高木氏に仕えて郷士となり、庄屋職もつとめた松川家が占めています。松川家前が表道筋で、陣屋は南向きで正門が南側にありました。藩士たちの住居も、陣屋内東側に多く建っていました。

また、明治元年 (1868) には、陣屋内に藩校の丹南学校が正坦によって開設されました。午前は漢学や筆道、午後は武術を教えました。生徒は藩士の子弟だけでなく、庄屋・年寄や豪商の子弟も含み、通常 50 人、寄宿者も 15 人を数えました。就学年齢は 6 歳から 15 歳にわたりましたが、廃藩置県で廃校となりました。のち、丹南小学校 (現美原北小学校) に引き継がれていきました。

高木氏は、来迎寺を菩提寺としたことから、境内には正次と 11 代正明の五輪塔が現存しています。旧藩士家の墓も、正次墓のまわりに見られます。また、天保 14 年 (1843) に再建された山門前には、14 代で子爵の高木正得が旧藩士家の協力を得て、昭和 12 年に記した「旧丹南藩主高木主水正陣屋址」の石碑が建っています。正得の 2 女が三笠宮崇仁親王の妃である百合子様で、昭和 16 年に皇族へ嫁がれました。

初代高木正次墓と丹南藩陣屋址碑

48 丹南天満宮の文化財

市内最古級の本殿・石鳥居と石灯籠群　　丹南３

丹南３丁目に鎮座する丹南天満宮本殿は、桃山時代の様式を残した江戸時代初期の建立として知られています。現存する市域の神社本殿の中でも、最古級の１つです。三間社流造で、屋根は檜皮葺き、全体に丹塗りを施し、東面しています。

元文５年 (1740) ４月に書かれた『丹南村明細帳』には、祭神は天神・天照大神・春日大明神とあります。天神、つまり菅原道真をはじめ、皇祖神の天照大神、中臣氏の祖で春日神である天児屋根命を祀るのです。当時の境内は「東西参拾五間、南北拾五間」とあり、本殿屋根は檜皮葺きから瓦葺きに変えられ、神主はいないと記されています。

昭和 54 年 (1979) に本殿の解体修理工事が行われましたが、この時、北側面の浜床の縁板底に、享保８年 (1723) ３月の大工墨書が見つかり、床などの修理が行われたことがわかりました。さらに、幕末の安政２年 (1855) には、本殿の彩色をきれいに塗り変えたという棟札も見つかりました。昭和の修理に際して、その時の瓦葺きから、創建当初のものと考えられる檜皮葺きに戻されました。しかし、30 年経って檜皮の傷みが激しくなったことから、平成 22 年９月に檜皮が葺き替えられ、いま見るような姿によみがえったのです。

ところで、丹南天満宮で特筆されるのは、古建築の本殿だけではありません。境内入口に建つ石鳥居は「延宝七己未年」と刻まれ、江戸時代前半の延宝７年 (1679) に建てられています。これも現存する市内の石鳥居の中で、最古級のものです。他にも、末社の稲荷神社前には天明５年 (1785) の石鳥居があります。

延宝鳥居の横には、一列に７基の石灯籠が並べられ、壮観です。南側から「天満宮　御神燈」（２基）、「天照皇大神宮　神燈」、「愛宕山大権現　神燈」、「金毘羅大権現　常夜燈　享和元酉年九月」「秋葉山大権現　常夜燈　享和元酉年九月」「大神宮　常夜燈　村内安全文久三亥年十一月吉日」と見られます。現在、天満宮境内は玉垣で囲まれていますが、以前は鳥居の両側は土塀が続いており、石灯籠の多くは、土塀に沿った東側道路に並べられていました。

享和元年 (1801) の２基の石灯籠は、水の神様である金毘羅大権現と、京都の愛宕山大権現と同じく、防火の神様である静岡の秋葉山大権現を祀っています。また、天照大神を祀る「大神宮」の伊勢燈籠は、幕末の文久３年 (1863) の建立で、「村内安全」のシンボルとなる常夜燈だったのでしょう。

これらの石灯籠には、暗くなると火がともされました。享和元年という年は、瓦葺きであった拝殿 (本殿と同時に解体) の鬼瓦に「享和元辛酉歳正月吉日」の銘がありますので、同年の拝殿修理と共に、石灯籠も奉納されたのです。

拝殿前には、一対の石造狛犬があり、台石に「文化八辛未歳八月吉日　氏子中」と刻むように、文化８年 (1811) の作です。

丹南天満宮

49 丹南に祀られる牛滝さん

牛神を祀る段の神さん　農作物の収穫を祈願　　丹南５

市域最南端、丹南５丁目の小字「段」に牛滝さんの祠が祀られています。地元では、段の神さんとよんでいます。丹南の産土神である丹南天満宮 (丹南３丁目) の南方にあたります。

牛滝さんは、小円丘あるいは小方丘と思われる人工の高まりに祀られています。同地は、縄文時代から近世に至る丹南遺跡に含まれ、付近から古墳時代の埴輪も見つかっていますので、小丘はもともとは古墳だったかもしれません。境内にはモチの巨木が茂り、昔から子供たちの遊び場でもありました。

元文５年 (1740) ４月に書かれた『河州丹南郡丹南村明細帳』に「当村南二牛神境内三間弐間半 荒地」と見られることから、江戸時代半ばまでに、牛を神体として祠が建てられていたのでしょう。観心寺 (河内長野市) から、牛神を迎えたと伝えられています。牛は農耕に欠かせない動物でした。農家は、田畑を耕す牛を家族同様、大切にしたのです。

『丹南村明細帳』によると、元文５年当時、丹南村では、家数 84 軒、人口は 385 人。牛は 20 頭飼われていましたが、馬は１頭も飼育されず、牛馬医者もいないと記しています。

境内は近年、整備されましたが、祠の前に一対の石灯籠が建てられています。いずれも、竿石の正面に「奉献御神前」とあり、側面に「天明五年」の年号が読みとれます。天明５年 (1785) に石灯籠が奉納されたのですが、この時期、全国的に天明の大ききん (1782 ～ 88) と称するほどの天候不順が続き、農作物が不作でした。市域

の村々でも、とくに天明２年 (1782) から翌３年にかけて凶作にみまわれ、麦や綿などの生産が激減したのです。

丹南村では、そのためか、各社に祈願を行ったようです。牛神の牛滝さんだけでなく、丹南天満宮の境内にも天明５年４月に建立された石鳥居や、同年の「御神燈奉献」とある石灯籠が見られます。拝殿に向かって右側に末社の稲荷（いなり）神社が祀られていますが、その稲荷神にそれらの鳥居や灯籠が奉納されています。稲荷社は、農耕をつかさどる神だったからでしょう。

ところで、丹南の農家では、耕運機が普及して、牛による田起しが少なくなった昭和 30 年代ごろまで、田植え前の６月初旬 (旧暦の５月５日の端午（たんご）の節句（せっく）)、牛を牛滝さんに連れて行きました。そして、各家の屋根にも取りつけられていた、しょうぶ・よもぎ・せんだんの枝を１つに束ね、牛の角につけながら、牛滝さんの祠のまわりを３回まわらせ、牛の健康を願う風習がありました。

いまでは、こうしたことも無くなりましたが、地域では、天神さんの日にあたる毎月 24 ～ 25 日、丹南天満宮で供え物をすると同時に、牛滝さんにもお供えをして、江戸時代以来の農耕の神さまを守り続けているのです。

丹南の牛滝さん

50 松川長右衛門と狭山池用水

藤澤南岳が書いた丹南村庄屋松川長右衛門の碑　　丹南４

中高野街道が府道中央環状線を南へ越えた丹南４丁目に「松川長右衛門碑　藤澤南岳書」と刻まれた自然石が建っています。現在、近鉄バスが通っている中高野街道は新道で、もともとはすぐ東を走る古道が本道でした。その旧中高野街道に面して、石碑が見られるのです。

裏面には、「大字丹南　大□□□□□十五日　建立」とあります。年月が剥落していますが、丹南村丹南が大正５年 (1916) ３月 15 日に建碑したものです。

ここに顕彰された松川長右衛門は、名を武好といいます。丹南藩主高木氏が来迎寺 (丹南３丁目) の東側に陣屋を置いた丹南村の庄屋でしたが、郷士身分でもありました。住宅は、中高野街道の西側、来迎寺や丹南天満宮へ向かう陣屋表道に面し、陣屋に南接していました。

「松川家系図」(明治 23 年３月) によりますと、松川氏は近江国 (滋賀県) の戦国武将であった佐々木氏の一族で、神崎郡松川庄が本貫地でした。織田氏に仕えていた松川氏 15 代の義久が戦国時代末期に丹南に移ったと家伝にあります。

長右衛門武好は 24 代で、江戸時代前半の承応３年 (1654) ６月に生まれました。庄屋として村政に関わっていた元禄７年 (1694) のことです。松原など丹比野に水を送る狭山池 (大阪狭山市) が改修されることになりました。このとき、長右衛門は狭山池水下用水掛りである、現在の松原・美原など 40 ヵ村の長となり、私財を投げ出して２年の歳月を費やし、池の改修に尽力したと伝えられています。

以後、長右衛門の功績によって丹南にはこれまでの狭山池からの

通例の用水とは別に、長右衛門用水とよぶ課役が無いうえ、12 時間にも及ぶ長時間の用水を受ける権利が与えられたのです。このため、丹南は他村と比べて干害の被害が少なかったといわれています。

長右衛門は、元禄 10 年 (1697) に亡くなりました。のち、丹南の人々は長右衛門の遺業に感謝し、彼の命日である 3 月 15 日には休業し、菩提寺である来迎寺の松川家墓所にお参りしたのです。初代丹南藩主高木正次(まさつぐ)の五輪塔の南側に、墓石があります。

大正 5 年、長右衛門の顕彰碑が建てられました。その際、そこに揮毫(きごう)したのが大阪でも有名な漢学者であった藤澤南岳でした。

南岳は天保(てんぽう) 13 年 (1842)、讃岐(さぬき) (香川県) の生まれ。父の東蔵(とうがい)のあとを継いで、明治以降、大阪の淡路町 (中央区) で泊園書院(はくえんしょいん)という漢学の私塾を主宰して、関西における文化・教学に大きく寄与しました。南岳は大正 9 年 (1920) に亡くなりましたが、大阪府内を中心に神社標石や石碑に撰や書をたくさん残しています。

同碑は、のち傷んだことから、町会や丹南水利組合が昭和 59 年 (1984) 3 月 15 日に修復しました。同時に由来記の石碑も新設し、現在に至るまで長右衛門の命日には石碑に参り、その徳を偲んでいるのです。

松川長右衛門の碑

道しるべ(道標)一覧

掲載番号	名称	所在地	刻字	形態	建立時期・建立者など
―	中高野街道 阿保4丁目 地蔵堂前道標	阿保4丁目	正面「右 八尾 信貴山　左 平野 大坂」 右面「明治十五年九月建之」	角柱	明治15年 (1882)9月
―	三宅別所霊園 内地蔵像道標	三宅東 3丁目 無縁墓内	正面右側「すぐ ならみち」 正面左側「左 八まんみち」	地蔵堂	江戸時代
―	三宅別所霊園 内地蔵像道標	三宅東 3丁目 無縁墓内	正面右側「右 てんしん 左 はし■」 正面左側「すく 八まん宮 施主慈誉 正眼」	地蔵堂	江戸時代 慈誉正眼
―	三宅別所霊園 内地蔵像道標	三宅東 3丁目 無縁墓内	正面右側「右 はし■暢誉宗把」 正面左側「左 そうしゝみち」	地蔵堂	江戸時代 暢誉宗把
―	長尾街道 一津屋1丁目 地蔵像道標	一津屋 1丁目	正面「右 平野大坂　左 さかい 道」 右面「すく ひらを」 左面「すく ふしい寺なら」	蒲鉾形 角柱	江戸時代
27 (南東P6)	長尾街道 ちちかみばし 道標	上田1丁目 松原郵便局前	正面「ちゝかみはし」 右面「長尾街道」 左面「長尾街道」 裏面「明治四十三年二月修繕 大阪府」	角柱	明治43年 (1910)2月 大阪府
34 (南東P20)	中高野街道・ 住吉道 新堂3丁目 道標	新堂3丁目	正面「左 さかい 住よし 道」 右面「右 平野 大坂 道」 左面「天保五年午正月建之 釋善心」 裏面「すく かうや よしの 道」	尖頭形 角柱	天保5年 (1834)正月 釋善心 元の位置は 住吉街道北側
―	大阪市・ 熊野街道道標	新堂4丁目	正面「左 天王寺 大阪城」 右面「右 住吉 さかい」 左面「すく 阿へ乃神社」	角柱	大阪市住吉区 帝塚山から移設 昭和時代
―	中高野街道 岡4丁目道標	岡4丁目	正面「中高野街道」 裏面「平成十三年松原市」	角柱	平成13年 (2001) 松原市
38 (南東28)	竹内街道 「緑の一里塚」 モニュメント	立部5丁目	竹内街道	モニュメント・解説文	平成25年 (2013)3月 大阪府・ 松原市
40 (南東P32)	竹内街道 モニュメント	岡5丁目	竹内街道	モニュメント・解説文	平成24年 (2012)3月 松原市
41 (南東P34)	竹内街道・ 中高野街道 茶屋筋道標	岡5丁目 松原南 図書館前	正面「右 ひらの 大坂 道」 右面「左 さやま 三日市 かうや 道」 左面「左 さかい 道」 裏面「寛政九丁巳年五月 いせこう中」	蒲鉾形 角柱	寛政9年 (1797)5月 いせこう中 元の位置は 竹内街道南側

掲載番号	名称	所在地	刻字	形態	建立時期・建立者など
41 (南東 P35)	竹内街道・ 中高野街道 分岐道標	岡 4 丁目	正面「左 ふちゐ寺 上太子 やまと 道」 右面「右 さやま (三日市) かうや」 左面「寛政九年丁巳五月 いせこう中」 裏面「左 ひらの 大坂 道」	角柱	寛政 9 年 (1797)5 月 いせこう中
73 (南西 P48)	敬念寺前 元追分道 地蔵像道標	高見の里 3 丁目	正面右側「右 はせ よしの」 正面左側「左 なら ふしいてら」 正面下部「天和二壬歳 七月十日」	地蔵堂	天和 2 年 (1682)7 月 10 日 元の位置は長尾街道・住吉街道の追分
73 (南西 P48)	敬念寺前 元追分道 地蔵像道標	高見の里 3 丁目	正面右側「右 はせ よしの」 正面左側「左　ふちい寺　なら」	地蔵堂	江戸時代 元の位置は長尾街道・住吉街道の追分
77 (北西 P7)	教通寺前 地蔵像道標	南新町 1 丁目	正面右側「旭童女 享保十三戊申 正月十三日」 正面左側「是南かうや道 東なら婦しい寺」	地蔵堂	享保 13 年 (1728) 正月 13 日
—	歳の上 地蔵尊道標	天美我堂 7 丁目 善正寺前 地蔵堂	正面「すく 志き山」 左面「右 さかい道 施主 東西我堂 村中 世話人 中長 松甚 ■兵衛 川惣 嶋安 惣七 弥元 嘉永元戊申 七月吉」	地蔵堂	嘉永元年 (1848)7 月 東西我堂村中
—	天美南 6 丁目 地蔵像道標	天美南 6 丁目	正面下側「左ハ住吉天王寺 のミち」	地蔵堂	江戸時代
—	下高野街道 天美東 8 丁目 地蔵像道標	天美東 8 丁目	正面「右 志き山八尾ひらの三宅村 左 大坂天王寺あま岸」 左面「施主我堂村嶋屋安兵衛」 裏面「すく　高野山狭山道」	蒲鉾形 角柱	江戸時代 我堂村 嶋屋安兵衛
—	天美東 8 丁目 児童公園内 地蔵像道標	天美東 8 丁目 池内総合 会館前	正面右側「右 天王寺 大坂」 正面左側「左 ならミち」	地蔵堂	江戸時代
—	天美東 8 丁目 児童公園内 地蔵像道標	天美東 8 丁目 池内総合 会館前	正面右側「右 八尾平野道」 正面左側「左 天王寺中の」	地蔵堂	江戸時代
—	天美西 2 丁目 地蔵像道標	天美西 2 丁目 安楽寺西 側民家内	正面右側「右ハ 天王寺へ七十丁」 正面左側「左り 天王寺住吉道」	地蔵堂	江戸時代 非公開
—	最勝寺前 地蔵像道標	天美北 5 丁目	正面右側「右 ひらの」 正面左側「左 すみよし」	地蔵堂	江戸時代

松原の郷土を知る会『まつばら歴史さんぽ　道しるべ紀行』2015 より一部改変加筆

執筆　西田孝司（にしだ　たかし）

昭和 22 年、松原市上田生まれ。
関西大学大学院文学研究科日本史学修士課程修了。
主な著書に
『雄略天皇陵と近世史料』（末吉舎、平成３年）
『続天皇陵を発掘せよ』（三一書房、平成７年・共著）
『文久山陵図』（新人物往来社、平成 17 年・共著）
「河内大塚山古墳と陵墓参考地」（『松原市史』第２巻、平成 20 年）などがある。

協力者一覧　　南東コース

栄久寺・円正寺・大阪府教育委員会・岡町会・願正寺・柴籬神社・浄光寺・新堂町会・泉福寺・丹南町会・丹南天満宮氏子・出岡町会・来迎寺・良念寺・橋本達也・松川敏之　（順不同・敬称略）

表紙…柴籬宮旧跡 (『河内名所図会』享和元年・1801 年) より

松原歴史ウォーク　２南東コース

発行日　平成 27 年 10 月 31 日
執筆　西田　孝司
編集　松原市教育委員会
発行　松原市
大阪府松原市阿保１－１－１
☎ 072-334-1550
印刷　株式会社　地域文化財研究所